

小学校における道徳科・生活科の充実をめざして

—地域や世間との関わりを通して—

高度学校教育実践専攻教職実践高度化系
生徒指導コース

実習責任教員 阿形 恒秀
実習指導教員 末内 佳代

氏名 一宮 由果

キーワード：地域知，世間知，説話，戦争体験，交流，心のつながり

1 課題設定の理由

今回の実践研究は、地域が持っている知恵（地域知）と世間が持っている知恵（世間知）を教育活動に取り込むことで、学校で身につける知恵（学校知）を高めることができるのではないかと考え取り組んだ。

阿形（2013）は「地域における学校の存在意義は、地域における義務教育対象年齢の子どもの教育の機会均等等の問題であるだけではない。地域に学校があり、子どもの姿があり、子どもを持つ若い親がいて、学校が地域住民をつなぐ場となり、子どもと大人・大人と大人の交流が生じ、子どもは地域への愛着を深め、大人は地域の担い手の継承者としての子どもの姿に未来を託す希望を見出し、地域住民の紐帯が深まり、地域が維持・継承されていく…、このように考えると、地域コミュニティの維持の問題としても、学校の存在意義は極めて大きい。」と述べている。

今後も少子高齢化、人口減少が予測される徳島県において、地域社会と学校が連携して児童生徒の教育に関わっていくことはこれまで以上に重要な役割を果たすものである。

また、庄司（1979）は「学校教育は教育全体から見ればひとつの特殊形態にすぎないのに、あまりにも偉力を発揮したが故に学校教育にあらずんば教育にあらずというほどまでになっ

た。これは変則的なことではなかろうか。そろそろ反省すべきときにさしかかっているのではないか。今は新たな習俗づくり、その過渡期にあるとあってよいであろう。時間はずんとかけたいものだ。」とも述べている。もともと教育とは学校だけでなく地域や家庭で子どもに関わる全ての大人がその責任を担っていたはずである。しかし、いつの頃からか庄司のいうように学校教育のみが教育であるかのように語られるようになった。学校教育に過剰な期待と責任を背負わされているように教師が感じるのはそのためかもしれない。けれども学校教育は万能ではない。学校知には限界がある。学校教育において子どもに関わる教師は、そのことを自覚し、もっと地域や社会から謙虚に学ぶ必要があるのではないだろうか。

そこで筆者は、学校知に地域知や世間知を取り入れることで、子どもたちは何を感じ考えるのか、また教師はそこにどんな意味を見いだせるのかを模索するために、この実践研究に取り組むことにした。

2 実践研究の目的

実習校のすぐそばには忠魂碑が建っているが、その由来を知っている児童はほとんどいない。しかし筆者は、地域における戦争の惨禍を知る必要があると感じた。なぜなら地域の方々が体験した戦争や大切な家族の死について考えるこ

とは、たくさんの人々の命の重さや尊さを想像する第一歩となると思うからである。そのことによって、子どもたちはこれからの自分の生き方について思案したり、たくさんの人々との関わりの中で生かされている自分に気づいたりしていくと考え、地域の方の戦争体験を授業に取り入れることにした。

また、地域に昔から残る説話は、その土地で生きてきた人々の知恵や死生観、地域に根付いた信仰が宿っているものも多い。自分たちの暮らす郷土に愛着と親しみをもち、次代に引き継いでいくためにも地域の説話は大切な役割を担っている。そこで地域の説話を教材化し、授業を行うことにした。

さらに今、世界中を混乱に陥れている新型コロナウイルス感染症は、病気による健康被害だけでなく様々な差別事象をも生みだし、大きな社会問題となっている。このような時期だからこそ、コロナの感染防止の問題だけでなく、不安を引き起こす感染者・感染地域・医療従事者等に対する差別心や忌避意識の問題と向き合い、社会の断絶を防ぐにはどうしたらよいかをじっくり考える時間を持つことが大切であると考えた。そこで日本赤十字社のホームページの資料をもとに教材を作成し「心でつながる」をテーマに全学年での授業実践に取り組むことにした。

3 実践研究の方法

河合(1986)は事例研究の意義について、「ひとつの症状について何例かをまとめ、それについて普遍的な法則を見出すような論文よりも、ひとつの事例の赤裸々な報告の方が、はるかに実際に『役立つ』と述べている。教師にとっても、目の前にいる学級の子どもたちは25分の1や30分の1ではない。どの児童も1分の1の

大切な存在である。だからこそ教師は児童一人一人に丁寧に寄り添い、その言動の意味を深く考えていくことが児童理解において重要であると考え、児童との関わりの中で起こった個別具体的なエピソードを取り上げて、分析することにした。

4 実践研究の実際

(1) 地域の昔話

地域で暮らすαさんが体験したという、大きな火の玉が山道を転がっていった話や狸が提灯行列をしていた話の他に、首なし馬や天狗の説話などを教材化し、1, 2年生を対象に道徳科(伝統と文化の尊重, 国や郷土を愛する態度)の実践授業を行った。子どもたちはαさんの話を面白がったり怖がったりしながら熱心に聞き入っていた。感想には「首なし馬がこわい。夜眠れないかもしれない」「天狗の背中に乗ってみたい」という子どもらしい素直な気持ちが書かれていた。また「うちのお姉ちゃんは川で河童のお皿を見たらしいよ」「庭の掃除しよったら八咫鳥が飛んできた」など、家庭での出来事を話してくれる児童もいた。

(2) 地域の方の戦争体験を知る

地域の説話を教えてくださったαさんと、地域遺族会の代表をされているβさん夫妻は、9歳~10歳の時に太平洋戦争の終戦を迎えている。そこで戦中戦後の生活の様子を知りたいと聞き取りに伺った筆者に、詳しく語ってくださった。それをもとに作成した教材を使い全学年で道徳科(生命の尊さ)の実践授業を行った。授業中の様子や振り返りから、「生きるということについてこれからも考えたい」「家族を亡くしても生きていかなければならないことはつらい」「身近にいる友だちや家族をもっと大切にしたい」「日本の憲法に平和主義ができたわ

けがよくわかった」「自分は絶対に戦争をしない」など児童一人一人が地域の方が体験した苦しみや悲しみに共感し、考えを深めることができた様子が伝わってきた。

(3) 新型コロナウイルス感染症関連

この実践は今、地域や社会で問題となっているコロナ禍の実態から学びを深めようと考え構想したものである。日本赤十字社のホームページや新聞、インターネットなどの情報を参考に教材を作成し、「心でつながる」をテーマに全学年で道徳科（公正，公平，社会正義）の実践授業を行った。授業では、まず「病気・不安・差別」の負のスパイラルについて学んだ。その後、コロナ感染者への心温まる対応とコロナ差別の事案を比較したり、筆者の家族のエピソードを紹介したりした。そして今の自分にできることは何かを考えた。児童の感想には、「遠くに離れて住む祖父母に電話をしたい」「もしも友だちや家族が感染しても応援したり励ましたりできる自分になりたい」など、コロナ下における心のつながりの大切さについて考え、書くことができた。

(4) 地域の方・園児へのプレゼント作り

この実践は2年生の生活科の学習の時間を利用して行った。例年、運動会に地域の老人会の方々を招待し交流を行っていたが、コロナ下の今年是不可能になった。そこで間接的な方法で地域の方々へ日頃の感謝の気持ちを伝えることはできないかと考え、再会と健康を願う気持ちを込めて、可愛らしいハート模様が入ったフウセンカズラの種をプレゼントする活動に取り組んだ。イラストを描くのが好きな児童が多いことから、メッセージと自分の好きなイラストを描いたカードを種と一緒に贈ることにした。メッセージには、「コロナにかからないでね」「こ

れからも元気でいてください」という体調を気遣うものや、「また学校に来てほしいです」「昔の遊びをもっと教えてください」など交流の再開を願う言葉などが書いてあった。また、「ぼくはサッカーをがんばっているの、コロナがおさまったら見に来てください」と、自分が頑張っていることを伝えるメッセージを書く児童もいた。丁寧に文字を書いたり、はみ出さないように集中して色を塗ったりする様子から児童の温かい気持ちが伝わってきた。さらに、地域の公民館の方にお願ひし、種のプレゼントを公民館の玄関に置かせていただいた。

また、小学校の花壇で大きなヒマワリが花を咲かせるのを見ていた子ども園の教師から、種を分けてほしいという申し出があった。そこで、この機会に児童と園児の間接的な交流が持てないかと考え、来年入学予定の年長組の園児に小学校を紹介する手紙を送ることにした。子どもたちは自分が入学する前の、期待と不安が入り混じった気持ちをよく覚えていた。そして、「小学校にきたら、いっしょにあそぼうね」「早く入学してきてね」「勉強は、かんたんだから安心してね」など園児を思いやる内容や、入学を歓迎するような内容の手紙を書いた。取組の様子から、園児に喜んでもらいたい、子ども園の先生方に自分たちの成長を伝えたいという強い思いが伝わってきた。

5 実践の成果と課題

本実践研究は、地域の知恵と世間の知恵を学校に取り込むことで学校の知恵を高めることを目的として行った。コロナ下のため当初の計画とは違った実践が多くなったが、特殊な状況下であったからこそ、限られた条件の中でできることは何かを考え実践を行った。

αさんが語る不思議なお話は、この世には科

学や理屈では説明できないことが時として起こりうるということを子どもたちに強く印象付けた。中には「いつか自分の子どもが生まれたら、この話を聞かせたい」という気持ちが芽生えた児童もいる。αさんから聞いた説話を、今度は子ども自身が自分の言葉で家族や友だちに語って聞かせることで、消えゆくとしている地域の説話の継承者となり得たのである。このように地域の知恵に触れることで、古くから伝わる説話の意味深さや郷土への愛着を持つことができたのではないかと思う。

また、地域に残る戦争の爪痕を知り、地域の方が体験した家族との悲しい別れに寄り添うことを通して、子どもたちは自分の生き方や自分の大切な人々に思いを馳せることができた。戦火を生き抜き今も地域を支える人々が、これからの世代に託した「人を思いやれる優しい人に」という願いをしっかりと受けとめ、これからも学び続けていってほしい。

今回の実践授業は地域の方々の協力のおかげでできたものである。その土地に生まれ、縁あってその土地を守り続けるαさんやβさん夫妻の生き様や信念に触れることで、子どもたちの心は大きく揺さぶられたはずである。地域から学ぶことの意味とは、地域に暮らす血の通った人間の実体験から学ぶことであり、地域の方々が大切に語り継いできた地域の伝統や願いを子ども達が引き継ぐための大切な教育であると考ええる。

また新型コロナウイルス感染症によるいじめ防止の実践授業については、コロナデマやコロナ差別の事案が大きく取り上げられ始める前にすべての学年で実践した。全学年の児童が同じテーマについて考えることによって、いじめの未然防止の意識を学校全体でも高める一助にな

ったと考えている。

さらに2年生の生活科の学習では地域の方々や子ども園へ種や手紙を届けるという間接的な交流を持つことができた。このような活動ができたのも、事前に地域の方や公民館の方、子ども園の先生方と顔見知りになり、お互いに交流をしたいという願いを持っていることを共有できていたことが良かったのだと思う。

以上のような成果をあげることができた一方で、課題は特定の児童の変容が分かるほど長いスパンで関わるができなかったという点である。特に、授業でしか関わりのない児童の発言や文章に込めた思いについて、時間をかけて聞いたり理解したりすることができなかったこともあった。それらの課題解決に向けて、担任と情報共有し、さらに個々の児童理解を深めていくことが大切であると感じた。

また今回、筆者が行ったような聞き取りから教材化を行うことや、コロナ関連の授業のような前例のない課題を教材化し授業を組み立てるのは時間がかかる作業でもある。しかし、地域と学校の連携を深めていくことは、少子高齢化による人口減少社会において成熟した地域社会を形成していくためにも今後さらに不可欠なものになるだろう。また、コロナ関連の授業のようにリアルタイムに社会で起こっている現象や実態から学ぶべきことは多い。リアリティのある課題と向き合うことで、児童が自分の行動や生き方について考えたり、仲間と共に解決策を練ったりして思考を深めることができるからだ。

地域の知恵、世間の知恵を学校教育の中にもどのように取り入れていくのか、また、どのように位置づけていくのかを教職員全体で考えていくことも大切だと筆者は考える。